

## アイヌ文化関連施設における 「アイヌ語の多言語化」課題—中国語を目標言語として

劉 高力\*

### 要 旨

ウポポイ（民族共生象徴空間）の開業をはじめ、国内外でアイヌ文化への注目度が極めて高くなってきた。したがって、アイヌ文化を正しく海外に発信するため、日本語・英語以外に、さまざまな言語でのアイヌ文化の紹介・翻訳作業が急務になった。しかし、言語学・文化人類学・文化政策などの観点から「アイヌ語の多言語化」は十分に検討されておらず、翻訳起点言語としてのアイヌ語の扱いにも課題がある。本稿では、2021年10月時点での国内のアイヌ文化関連施設32か所の多言語対応状況を整理し、「アイヌ語の多言語化」という課題を提起する。そして、中国語を目標言語とした翻訳実践の視点から、用語選定や表記方法、発音への配慮などを議論し、国立アイヌ民族博物館で試用された中国語表記法を紹介する。

### キーワード

アイヌ語の多言語化、アイヌ民族、中国語表記、アイヌ文化関連施設、多言語、翻訳

### 1. はじめに

2020年7月12日、ウポポイ（民族共生象徴空間）が開業した。国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設を整備し、アイヌ文化を復興・創造・発展させる拠点として設立された初の国立施設である。ウポポイの誕生とともに、日本国内外でアイヌ文化に対する関心が高まり、世界への情報発信の必要性が高まっている。その結果、ウポポイの施設情報や設備案内、文化解説に関する各種ツールが多言語で翻訳・公開され、他の国内アイヌ文化関連施設でも多言語対応が進展している。

日本国内の各施設での多言語サービス対応に関する最初の指針として、2014年3月、「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」（国土交通省観光庁2014）が発表され、各地域・各分野の施設の標識・サイン等の多言語化が定められた。そして、オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会により、多言語対応の取組方針を「日本語、英語の2言語を基本としつつ、地域や施設の特性及び視認性

等を考慮し、必要に応じて、中国語・韓国語、更にはその他の言語も含めて多言語化を検討」するよう定めた（総務省2014）。ここ数年においても、文化庁や観光庁、環境省、東京都歴史文化財団などの官公庁・公的団体による多言語対応施策が継続されており、たとえば「文化財多言語解説整備事業」（2018-2021）、「文化財の多言語化ハンドブック」（2019）、「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」（2021）、「国立公園等多言語解説等整備事業」（2020）、「文化施設のための多言語対応ガイド」（2017）などが挙げられる。

しかし、上記の参考文献の公表年からわかるように、日本国内における多言語サービス対応は、検討の歴史が非常に浅い。英語以外の言語を目標言語とする多言語翻訳、サービス対応はさらに始まって間がなく、言語の選択、翻訳対象の確定、文字案内と音声案内の作成などさまざまな課題がある。特に、ウポポイをはじめ、アイヌ文化関連施設がアイヌ語の多言語化作業をする際には、上記のような多言語整備事業、及び指針がまだなく、「アイヌ語の多言語化」という課題が浮かび上がる。従来の翻訳の起点言語である日本語からの多言語化作業と違

\* LIU Gaoli 国立アイヌ民族博物館研究員

い、アイヌ語から多言語への翻訳には様々な問題が生じた。

筆者は、ウポポイ開業前、2020年5月から現在にわたり、ウポポイ施設内の中国語翻訳・チェック作業、国立アイヌ民族博物館の展示室内のすべてのキャプション、解説文、および映像・音声コンテンツの多言語化のための翻訳と、チェック作業に従事してきた。本稿では、そうした実践経験に基づき、アイヌ文化関連施設における「アイヌ語の多言語化」という、これまで十分に意識されてこなかった課題を提起する。さらに、中国語を目標言語とした多言語化実践の視点から、世界の中国語話者に向けた情報発信に関する考え方、専門用語の選定、中国語母語話者の地域特性に応じた音声ガイドの設計など、国立アイヌ民族博物館での具体的な翻訳作業例を踏まえて問題とその解決策を論じる。

最後に、「アイヌ語の多言語化」の実践の一環として国立アイヌ民族博物館の特別展示で試用された「アイヌ語の中国語表記法」の内容を紹介し、今後の多言語翻訳に資する事例として提示する。

## 2. アイヌ文化関連施設の多言語化の現状と「アイヌ語の多言語化」という課題

本稿における「アイヌ文化関連施設」とは、「資料の展示見学や各種体験ができる施設」（北海道観光振興機構 2021）を指す。なお、海外にもアイヌ文化財を

所蔵する機関は存在し、ロシア民族学博物館（Russian Ethnographic Museum）、アメリカ国立自然史博物館（Smithsonian National Museum of Natural History）、ロイヤルオンタリオ博物館（Royal Ontario Museum）などで多数の収蔵例が確認される。しかし、現地調査およびオンライン・バーチャル博物館の情報に基づけば、現地語と英語以外の言語による案内はほとんど存在していない。そのため、本稿ではこれらの海外施設を対象外とし、日本国内のアイヌ文化関連施設に焦点を当てる。本章では、国内におけるアイヌ文化関連施設の多言語案内の現状を整理し、「アイヌ語の多言語化」という課題を提示する。

### 2.1: アイヌ文化関連施設の多言語化の現状

公益財団法人アイヌ民族文化財団のホームページ「アイヌ文化を学ぶ」<https://www.ff-ainu.or.jp/web/learn/movie/index.html>（公益財団法人アイヌ民族文化財団）では、北海道内の31箇所をアイヌ文化関連施設として紹介している。本稿ではそれに基づき、文化人類学・民族学の拠点である国立民族学博物館を加えた計32施設における多言語案内の実施状況を調査・検討した。調査は、現地見学に加え、各施設のウェブサイトを用いたオンライン調査、および2022年10月時点での各施設への問い合わせを通じて行ったものである。各施設の館長や学芸員からも多大なご協力をいただいた。

以下、表1に、各施設の多言語対応の有無と言語の種類をまとめた。中国語に対応している施設は太字で示す。

表1 アイヌ文化関連施設の多言語案内の状況  
（施設順は道内→道外順、道内施設は公益財団法人アイヌ民族文化財団のサイトの掲載順による）

施設名称	ホームページの多言語対応	施設内のキャプション、解説、パンフレット等の紙媒体多言語対応	音声多言語対応
函館市北方民族資料館	英語	なし	なし
八雲町郷土資料館	なし	なし	なし
八雲町木彫り熊資料館	なし	なし	なし
北海道博物館	英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語	キャプション主に英語、大テーマ・必要な箇所に英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語を使用する	英語、中国語、韓国語、ロシア語
札幌市アイヌ文化交流センター	なし	約300点の展示物のうち、50点の展示物の多言語対応あり、英語、中国語（簡体字）、韓国語	なし
北海道立アイヌ総合センター 苫小牧市美術博物館	なし	キャプション・パンフレットに英語あり	なし
	民間の自動翻訳サービスを利用。英語・中国語（簡体字、繁体字）、ベトナム語、インドネシア語、ビルマ語	なし	なし
新ひだか町博物館	なし	なし	なし
新ひだか町アイヌ民俗資料館	なし	なし	なし
平取町立二風谷アイヌ文化博物館	なし	展示場では、QRコードを利用した多言語サービスを行う。英語、中国語（簡体字、繁体字）	なし

平取町アイヌ工芸伝承館 ウレシバ	英語	パンフレット英語	なし
萱野茂 二風谷アイヌ資料館	なし	なし	なし
二風谷工芸館	英語、中国語（簡体字）	パンフレットの挨拶のみ多言語、英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語	なし
知里幸恵 銀のしずく記念館 <sup>1</sup>	なし	なし（コロナ後に向けて検討中）	なし
よいち水産博物館	なし	なし	なし
ウボボイ	英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語、タイ語	キャプション英語、中国語（簡体字）、韓国語 大テーマ英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語、タイ語 パンフレット英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語、タイ語	音声ガイド機を利用した多言語サービスを行う。日本語、英語、中国語、ロシア語、タイ語
帯広百年記念館	なし	英語	英語、中国語、韓国語
蝦夷文化考古館	なし	なし	なし
本別町歴史民俗資料館	なし	キャプションに英語あり、パンフレット必要に応じて英語あり	なし
浦幌町立博物館	なし	なし	なし
網走市立郷土博物館	なし	なし	なし
北海道立北方民族博物館	英語、中国語（簡体字、繁体字）	キャプション日本語、英語；リーフレット日本語、英語、中国語（簡体字）、韓国語、タイ語、ロシア語	日本語、英語、中国語、韓国語、タイ語
紋別市立博物館	なし	なし	なし
名寄市北国博物館	なし	なし	なし
旭川市博物館	なし	一部のキャプションに英語あり	なし
川村カ子トアイヌ記念館	なし	なし	なし
釧路市立博物館	民間の自動翻訳サービスを利用。英語・中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、ロシア語、ベトナム語	展示は英語、案内看板の一部に、英・韓中（簡体字・繁体字）・ベトナム語	アイヌ文化展示について、Univoice アプリ、英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語
弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民族資料館	なし	英語	なし
標茶町博物館～ニタイ・ト～	なし	なし	Univoice アプリ英語、中国語（簡体字）、韓国語、スペイン語
アイヌ文化伝承創造館（オンネチセ）	英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語	チラシに英訳あり	なし
阿寒湖アイヌシアター<イコロ>	英語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語	チラシに英訳あり	なし
国立民族学博物館	英語	キャプション英語 大テーマ英語、韓国語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語（簡体字、繁体字）、フランス語 パンフレット英語、中国語（簡体字）、韓国語 展示場では、QRコードを利用した多言語サービスを行う。	音声ガイド機を利用した多言語サービスを行う。英語、アラビア語、中国語、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語

表1に示したように、32箇所の施設中、日本語のみ提供する施設が13箇所、多言語対応を実施している施設が19箇所（約59%）ある。そのうち、日本語・英語のみ対応するところを除き、3言語以上に対応している施設は13か所（約40%）、文字案内と音声案内の両方を多言語で提供している施設は7か所（約21%）にとどまる。

英語以外で対応されている言語を多い順に見ると、中国語（13箇所）（簡体字・繁体字対応10箇所、簡体字のみ3箇所）、韓国語（11箇所）、ロシア語（6箇所）、スペイン語（2箇所）、タイ語（2箇所）、ベトナム語（2箇所）、そして、インドネシア語、ビルマ語、アラビア

語とフランス語がそれぞれ1箇所である。

では、なぜ上記の言語を選択したのか。「文化施設のための多言語対応ガイド」(東京都歴史文化財団2017)「多言語対応の考え方 その一」によれば、多言語対応の一番重要な理由は訪日外国人の集客のためである。同ガイドでは、「英語対応を徹底したうえで、施設および周辺地域の訪日外国人の集客状況を踏まえ、多数言語での対応を進める」と具体的な考え方が示されている。

実際、コロナ拡散前、2019年の国・地域別の訪日外国人観光客数の順位（日本政府観光局JNTO 2019）から見ると、①中国大陸（9,594,394人）②韓国（5,584,597

③台湾 (4,890,652 人) ④香港特別行政区 (2,290,792 人)  
⑤米国 (1,723,861 人) ⑥タイ (1,318,977 人) ⑦豪州 (621,771 人)  
⑧フィリピン (613,114 人) ⑨マレーシア (501,592 人)  
⑩ベトナム (495,051 人) がTOP10 である。また、インバウンド総合ニュースサイト「訪日ラボ」の推計によれば、北海道に来ている訪日外国人インバウンド消費額ランキングでは、中国大陸、韓国、台湾、香港特別行政区、タイがTOP 5 国・地域である。

これらの統計データと表1 で示された多言語対応の傾向を照合すると、各施設が集客効果の高い言語（中国語、韓国語、タイ語など）に重点を置いていることが理解できる。

しかし、言語数を増やしただけで情報が十分に伝わるとは限らない。表1 に示した3 言語以上に対応している13 施設のうち、アイヌ文化に関する展示内容・キャプション・解説文などを実際に多言語で詳細に解説している施設は、中国語で7 か所、韓国語で6 か所にとどまる。その多くがスマートフォンでの閲覧、一部展示物のみの対応など、情報提供の範囲が限定的である。

つまり、日本国内のアイヌ文化関連施設においては、日本語・英語以外の言語話者に対して、同等の情報を同様の方法で提供することが難しい現状にある。

多くの施設は確かに訪日外国人の集客を意識して多言語対応を行っているが、本来期待されている「アイヌ文化の正確かつ深い発信」という目的には、まだ十分に答えきれていないのが現状である。

## 2.2 : 「アイヌ語の多言語化」という課題

冒頭で述べたように、2020 年のウポボイ開業を契機として、国立施設レベルでのアイヌ文化の多言語発信が急務となる一方で、「アイヌ語の多言語化」という従来にはなかった課題にも直面することとなった。

まず、「ウポボイ」という施設名の元もアイヌ語である。「(大勢で) 歌うこと」という意味をもつ愛称である。そして、ウポボイはアイヌ文化の復興拠点として、初の国立施設である。

ウポボイ（民族共生象徴空間）では「アイヌ語が第一言語となります」<sup>2</sup>と明言されており、この点に注目する必要がある。つまり、ウポボイ全体における多言語翻訳の起点言語はアイヌ語であり、日本語やその他外国語は

目標言語と位置づけられている。

これは、日本国内の他施設における多言語翻訳の基本構造（日本語を起点とし、外国語へ翻訳する）とは根本的に異なるアプローチである。

この差異を最も明確に示しているのが、ウポボイの中核機関である国立アイヌ民族博物館の表示方法である。展示室では、大テーマ・中テーマの解説、キャプションなど、すべての情報がアイヌ語を先頭に、日本語、英語、中国語、韓国語、ロシア語、タイ語の順に多言語対応されている。

このように、アイヌ語を第一言語とするウポボイの翻訳方針は、単なる多言語対応を超えた、先住民族言語の位置づけに関わる重要な実践であると言える。

図1 国立アイヌ民族博物館キャプションの一例



(出典：国立アイヌ民族博物館の基本展示)

「ことばは文化の標であり、その言語を使用する人の思考を表す」(森光 2010)。民族の言語は、その民族の文化や思考と密接に関係している。言語の習得が文化理解に不可欠であることは、以前から指摘されてきた。ある民族の文化を理解するためには、その民族の言語を学ぶことが重要である。この意味において、ウポボイにおけるアイヌ語の「第一言語」としての位置づけは、アイヌ民族を理解するために極めて重要な意味をもつと筆者は考える。さらに、先住民族であるアイヌ民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ社会を築いていくという象徴的な意義においても、ウポボイの存在は重要である。

本来、「民族共生象徴空間の整備及び管理運営に関する基本方針」においてアイヌ語が第一言語として位置づけられた段階から、それに対応するかたちで「アイヌ語の多言語化」に関する課題も議論されるべきであった。しかし、施設内に多言語の母語話者が不在であったこと、またその他さまざまな事情により、この課題は十分に認

識されてこなかった。その結果、館内の表示や解説文などは、従来どおり日本語を起点として多言語に翻訳されており、日本語とアイヌ語の関係性も他の言語と同列であるかのように受け取られる恐れがある。現在、国立アイヌ民族博物館では、「アイヌ語の多言語化」という課題を明確に意識し、多言語対応の方針について見直しを進めている。

2.1章で述べたように、表1に示した日本国内のアイヌ文化関連施設のうち、ウポボイを除く多くの施設では、日本語が第一言語とされている。しかし、いくつかの施設では、アイヌ語の紹介を意識して、アイヌ語からの音訳や翻訳が部分的に行われている。たとえば、平取町立二風谷アイヌ文化博物館や阿寒湖アイヌシアター<イコロ>では、アイヌ語を起点とした多言語の音訳を含む解説が導入されている。しかし、これらの施設において同じアイヌ語に対する翻訳が統一されておらず、用語のばらつきが見られる。たとえば「アイヌモシリ」の中国語表記は、平取町立二風谷アイヌ文化博物館のアプリでは「爱努母诗里」、一方で阿寒湖アイヌシアター<イコロ>のウェブサイトでは「爱奴摩希利」と記載されている。また、「アイヌ」という単語に関しても、同一ページ内に「爱努」と「阿伊努」という異なる表記が混在している。このように、起点となるアイヌ語の語彙が同一であるにもかかわらず、翻訳の形が統一されていないため、受け手の理解に混乱を招く要因となっている。

図2 多言語対応アプリにおけるアイヌモシリ



(出典：平取町立二風谷アイヌ文化博物館多言語アプリ 2021年9月アプリ画面撮影)

図3 「アイヌコタン」が同一ページ内で「爱努柯坛」、「阿伊努 KOTAN」と併記された例



(出典：阿寒湖アイヌシアター<イコロ> 2022年9月、ウェブサイト画面撮影)

以上のように、第一に、「アイヌ語の多言語化」という課題を認識することが、何よりも重要である。こうした意識を持つことによって、初めて問題の発見・分析・解決が可能となる。第二に、各アイヌ文化関連施設における事情や運営方針により、アイヌ語の位置づけには差があるものの、展示や解説においては、アイヌ語を起点とする視点から多言語化を行うという配慮が望まれる。第三に、アイヌ文化を効率的かつ正確に発信するためには、アイヌ語およびアイヌ文化にとって重要な用語や表現について、各施設が連携して翻訳の方針を検討し、統一的な翻訳基準を策定する必要がある。こうした課題を踏まえつつ、今後も「アイヌ語の多言語化」というテーマは、より広く、深く検討されていくべきであろう。

### 3. 「アイヌ語の多言語化」

#### —中国語を目標言語として

第2章に述べたように、筆者が「アイヌ語の多言語化」という課題を意識するようになったきっかけは、ウポボイにおいてアイヌ語が第一言語として位置づけられた後、実際にアイヌ語から他言語への翻訳作業に従事したことにある。とりわけ、本課題が最も具体的に表面化し、実務上の問題として直面する必要に迫られたのは、中国語への翻訳およびチェック作業に着手して以降であった。

本章では、筆者が国立アイヌ民族博物館において翻訳実務を担当する中で発見した主な問題点を整理し、それに対する現時点での対応策を紹介する。あわせて、館内での多言語化業務の一環として筆者が試作した「アイヌ語の中国語表記法」についても取り上げ、今後のアイヌ文化関連施設における多言語翻訳の参考事例としたい。

### 3.1：「アイヌ語の多言語化」における中国語作業の難問

国立アイヌ民族博物館における「アイヌ語の多言語化」に関する中国語翻訳作業は、2020年5月以降、正式に開始されたが、すでに作成されていたキャプションや解説文に多くの問題点が見つかり、それらの再検討・再作成が必要となった。

主な課題は以下の3点である。

#### (1) アイヌ語から中国語の漢字へ

アイヌ語は、現在主に、ローマ字やカタカナで表記される。アイヌ語の正書法は定まっていないためこれらにおいても幾通りかの表記法があるが、一定のルールに則り表記されており、それぞれの表記法における問題点も整理されている。一方、アイヌ語がキリル文字やハングル、漢字などで表記された例も歴史的な文献には残されているが、アイヌ語の表記法を整理した事例は少なく、問題点についても未整理の状態である。

2020年5月時点では、国立アイヌ民族博物館の展示キャプションや解説文における「中国語翻訳」も、英語と同様にアイヌ語部分はローマ字表記のまま掲載されていた。しかし、中国語圏では基本的に漢字が使用されており、外来語や人名、地名においても可能な限り漢字に置き換えて読むことが一般的である。実際、中国語を母語とする利用者の中にはローマ字表記に慣れていない者も多く、ローマ字で書かれたアイヌ語を見ても発音や意味を想像できず、「中国語での説明がない」と感じてしまうことがある。

さらに、中国大陸では、国内の出版物の認可管理を行う国家新聞出版総署が、中国語の文章の中に英語やアルファベットの略語を使用することについて、「言葉の乱用」は「中国語の水準や純度を著しく損ね、調和の取れた健全な言葉や文化環境を破壊し、好ましくない影響を社会に与える」(AFP ニュース 2010) と批判し、使用を認めない通達を出した。ローマ字やカタカナで表記され

るアイヌ語はそのままだと、アイヌ文化の中国大陸への発信に支障をきたす。さらに、日本国内のアイヌ文化関連施設からアイヌ語の中国語表記方針が提供されない限り、中国国内のメディアや関係機関がアイヌ文化や施設を紹介する際、独自の当て字を使用して紹介することになってしまう。その結果、複数の異なる表記が流通し、情報の混乱と理解の乖離が生じる恐れがある。

図4 国立アイヌ民族博物館キャプションの一例 下線で示した inaw は、「イナウ」に対応する中国語訳である

## イナウ

Inaw

inaw 이나우

アイヌとは人間のこと。カムイとは、動植物、太陽などの天体、山や川、雷などの自然現象、それに人間がつくった道具類などで、これらは人間同様にラマツ(靈魂)があり、それぞれ役割をもって活動していると考えられています。イナウは、人間からカムイへの贈物、祈り詞を届ける使者、人間のくらしを見守るなどの役割があり、さまざまな形につくられます。

(出典：国立アイヌ民族博物館基本展示  
下線は中国語訳部分に筆者が付したもの)

#### (2) 簡体字・繁体字と音声

2.1 で述べたように、アイヌ文化関連施設で、中国語での多言語対応を行っている13施設のうち、10施設(約77%)が簡体字と繁体字の両方に対応している。これは非常に高い割合であり、国連を含む海外の文化施設では中国語による案内がほとんど整備されておらず、あっても簡体字のみに限られるケースが多いことと対照的である。

このように、簡体字・繁体字の両方を積極的に提供している点は、日本の文化施設における多言語対応の特徴の一つであると言えるだろう。

しかし、簡体字と繁体字の共通点や相違点、使用地域については、前述のようなガイドラインを作成した関係者でさえ、十分に理解していない可能性がある。日本では、「簡体字の母語話者」や「繁体字の母語話者」というように、正確ではない言い方がしばしば見受けられるが、実際にはそのような区分では捉えきれない。今回、筆者がアイヌ文化関連施設を対象に、中国語対応状況について電話調査を行ったところ、調査件数は限られていたものの、いずれの施設においても「台湾のお客様向け

の繁体字」「台湾の言語としての中国語」といった説明がなされた。

しかしながら、先行研究が指摘しているように、中国語圏における言語使用の実態は、特定の地域と一対一で対応づけられるほど単純なものではない。同じ「中国語」という名称の下にあっても、文字や用法の理解は地域や社会的文脈によって異なり、これを一つの統一的体系として捉えること自体が誤解を生む要因となり得ることが指摘されている（黄 2009）。

書きことばの側面に注目すると、簡体字は中国大陸のみならず、シンガポール、マレーシア、インドネシアなどでも公的表記や教育現場において広く用いられている。一方、繁体字は中国香港特別行政区、マカオ特別行政区、台湾に加え、北米などの華僑コミュニティにおいても継続的に使用されており、その使用範囲は必ずしも特定の地域に限定されていない。

図5 国連ニューヨーク本部内部ギフトショップ 国連の公用語で書かれた挨拶 中国語簡体字  
(2018年3月22日 筆者撮影)



図6 セルビア・ベオグラードの歩道案内 中国語簡体字  
(2017年10月16日 筆者撮影)



さらに、日本における多言語公共表示の分析からも、中国語簡体字と繁体字が併存して用いられている実態が確認されており、受け手や文脈に応じた使い分けが行われていることが示されている（尹 2023）。加えて、同じ簡体字・繁体字を使用しているも、地域ごとに語彙選択や表現慣習が異なるため、直訳や機械的な対応が不自然さや誤解を生む場合がある。

一方、話しことばの側面では、中国において多数の方言や少数民族言語が存在していることが知られているが、その一方で、中国語標準語（普通話）は国家的な言語政策の下で公用語として位置づけられ、全国的な共通語として機能してきた。「方言間の差は非常に大きく、ある方言間では相互的意思伝達が不可能であり、たとえ同じ方言区にあっても、各小方言区の間には少なからざる差異が存在する」と指摘されている（胡 1994）。台湾やシンガポールにおいて使用される中国語も、標準語との相互理解可能性が高く、地域を越えた意思疎通が比較的円滑に行われているとされる。これに対し、香港特別行政区、マカオ特別行政区、マレーシア、ブルネイ、さらには北米の華僑社会では、広東語などの方言が日常言語として用いられており、相互理解が困難となる場合がある。

このように、中国語圏の言語状況は、文字体系と話しことばの双方において極めて複雑であり、その多様性を十分に考慮しないまま中国語対応を行うことは、翻訳や展示において誤解や不適切な言語選択を招く要因となり得る。アイヌ語の中国語翻訳においても、こうした中国語の多層的な言語現実を前提とした慎重な検討が不可欠であると言えよう。

### (3) 専門用語の翻訳・紹介

専門用語の翻訳は、中国語に限らず、他言語への翻訳全般において慎重な対応が求められる課題である。とくにアイヌ語の専門的な語彙を他言語に置き換える際には、対象言語の文化的背景や用語体系を考慮する必要がある。

現在の中国大陸における北方少数民族の中には、歴史的にアイヌ民族と関わりがあったとされる集団も存在し、文化的な共通点が指摘されている。そのため、アイヌ文化——特に漁撈、狩猟、手工芸などに関わる民具や技術——を紹介するにあたっては、中国の北方民族に関する知識や、民族学・文化人類学の専門用語に対する理

解が求められる。

例として、アイヌの伝統的住居「チセ」の中央にある囲炉裏は、アイヌ文化にとって宗教上・生活上極めて重要な空間である。これを中国語に翻訳する際、一般的な

図7 言語選択のCN(中国)・TW(台湾)のような選択肢



(出典：阿寒湖アイヌコタンのウェブサイト  
2022年10月10日 パソコンスクリーンショット)

図8 言語選択の中国語簡体字・中国語繁体字になった選択肢



(出典：阿寒湖アイヌコタンのウェブサイト  
2025年11月22日 パソコンスクリーンショット)

図9 音声ガイドに中国語簡体字、中国語繁体字の選択肢



(出典：北海道博物館のウェブサイト  
2025年11月22日 パソコンスクリーンショット)

翻訳会社では「火炉」や「炉子」といった表現を当てることが多い。しかし、「火炉」は通常、ストーブや調理用の金属製の炉を意味し、アイヌ文化における囲炉裏とは性質も機能も異なる。むしろ、中国南部や西南部の少数民族文化に見られる「火塘 (huǒ táng)」のほうが、アイヌの囲炉裏に近い文化的特徴を備えており、この表現の方が適切であると考えられる。

このように、文化的背景と専門的知見を踏まえた翻訳語の選定が、正確な情報伝達と異文化理解において不可欠である。

図10 中国の火炉 (2005年8月 北京にて筆者撮影)



図11 アイヌの囲炉裏 (2022年10月 ウポポイにて筆者撮影)



図12 中国の少数民族の火塘 (2013年8月 中国雲南省にて筆者撮影)



また、アイヌ民族の漁撈の際に大事な道具であるマレク（突鉤）、キテ（鉞頭）などは、中国の北方民族、たとえばオロチョン族やホジェン族が使用する漁撈具と類似している。これらの翻訳について、翻訳会社の訳文だと簡単に「魚鉤」、「魚叉」のように一般釣り用具として訳される傾向がある。しかし、中国における北方民族の文化紹介では、それぞれの道具に関してより詳細で文化的背景に配慮した説明が加えられている。

たとえば、マレクについては「帶倒刺可旋轉魚鉤（逆鉤があり、回転する魚鉤）」、キテについては「投射脱柄扎槍（投げて柄から外れて刺さる鉞）」のように、その構造や使い方に着目した翻訳が行われており、このような訳語の採用が、アイヌ文化の正確な理解に資するものと考えられる。

### 3.2: 国立アイヌ民族博物館での「アイヌ語の多言語化」における中国語への翻訳作業

前節 3.1 で述べた三つの課題に対応するため、国立アイヌ民族博物館では独自の中国語翻訳方針を策定し、実務に反映させてきた。本節では、その概要を紹介する。

まず、アイヌ語の音に対応する中国語漢字の当て字について、表記表（表2）を作成した。簡体字・繁体字いずれの使用者でも読むことができ、かつさまざまな中国語話者（標準語話者・方言話者）が発音しやすい漢字を選定することを原則とした。つまり、簡体字・繁体字の双方で字形が共通し、発音においても混乱が生じにくい漢字を使用することで、発信対象の幅を広げることを目指した。

また、ある漢字を用いて音を表記する場合、その漢字が本来持つ意味や、それによって喚起されるイメージが意図せず付随する可能性がある。そのため、特定の宗教的・政治的・文化的含意をもたない、なるべく中立的な印象を与える漢字を選ぶ必要がある。とくにアイヌ語は、中国語圏ではまだほとんど翻訳の前例がなく、西洋的な名前や宗教用語、あるいは特殊な国・地域概念と誤認されるおそれがあるため、その点に十分配慮した漢字選定が求められる。

さらに、アイヌ語の音節末に現れる特殊な子音（日本語では小さいカタカナなどで表記される音）を表すため、独自の工夫も施した。具体的には、「口」の部首をもつ

漢字を用いることで、その子音の「発音される感じ」を視覚的に表現し、音との連想を促す設計とした。

一方で、台湾の原住民研究においては、一部の研究者や関係者の間で、各民族の言語をローマ字表記のまま使用し、正確な発音を重視する姿勢が見られる。こうした言語尊重の考え方も参考にしつつ、国立アイヌ民族博物館における中国語翻訳では、必要に応じてローマ字表記を併記するなど、音声の再現性を損なわないよう配慮している。

また、多くの広東語話者の来館を想定し、「繁体字＝台湾」とする単純な対応方針を見直し、広東語音声ガイドの制作を推奨することとした。実際、同じ繁体字を用いる地域であっても、「アイヌ」という語の表記は異なっており、たとえば台湾では「愛努」、香港特別行政区では「阿伊努」とされる。

なお、1990年代から、アイヌ民族（アイヌ協会、国立アイヌ民族博物館、各地の保存会）と台湾の原住民との間には、さまざまな交流が行われてきた。その初期段階から「愛努」の表記が用いられてきた経緯もあることから、現在の翻訳実務においては「愛努」と「阿伊努」の両方の表記を保持している。

さらに、アイヌ文化に関する重要事項——儀礼、祭祀、道具名など——については、一つひとつを個別の専門用語として位置づけ、音訳または意識のどちらが適切かを丁寧に検討している。

つまり、中国語漢字による視認性と発音のしやすさに加え、ローマ字表記によって元の音を尊重する柔軟な対応を組み合わせることで、より多様な文化的背景をもつ中国語話者に向けた、適切かつ丁寧な情報発信を実現しようとしている。

## 4. おわりに

以上、本稿では、国内のアイヌ文化関連施設 32 か所の多言語対応の現状を検討し、そのなかでもこれまで十分に議論されてこなかった「アイヌ語の多言語化」という課題を提起した。そして、中国語への多言語化作業における具体的な課題を明らかにするとともに、国立アイヌ民族博物館において筆者が試作した、アイヌ語の中国語表記法の考え方と実践を紹介した。

表2 アイヌ語多言語化における中国語表記表

2-1 母音

アイヌ語カナ表記	アイヌ語ローマ字表記	中国語漢字表記
ア・イ・ウ・エ・オ	a・i / -y・u / -w・e・o	阿・伊・吾・艾・奥

2-2 開音節 (CV)

アイヌ語カナ表記	アイヌ語ローマ字表記	中国語漢字表記
カ・キ・ク・ケ・コ	ka・ki・ku・ke・ko	卡・剋・堀・楷・叩
サ・シ・ス・セ・ソ	sa・si・su・se・so	撒・希・斯・塞・索
タ・ー・トゥ・テ・ト	ta・ー・tu・te・to	塔・ー・突・苔・托
ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ	na・ni・nu・ne・no	那・尼・努・乃・挪
ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ	ha・hi・hu・he・ho	合・黑・乎・亥・侯
マ・ミ・ム・メ・モ	ma・mi・mu・me・mo	麻・密・姆・乜・摩
ラ・リ・ル・レ・ロ	ra・ri・ru・re・ro	拉・立・路・勒・洛
ワ・ー・ー・ウェ・ウォ	wa・ー・ー・we・wo	瓦・ー・ー・未・渥
ヤ・ー・ユ・イエ・ヨ	ya・ー・yu・ye・yo	押・ー・由・也・尤
チャ・チ・チュ・チェ・チョ	ca・ci・cu・ce・co	恰・其・曲・切・丘
パ・ピ・プ・ペ・ポ	pa・pi・pu・pe・po	帕・皮・普・派・珀

2-3 閉音節 (CVn)

アイヌ語カナ表記	アイヌ語ローマ字表記	中国語漢字表記
アン・イン・ウン・エン・オン	an・in・un・en・on	安・尹・温・彦・昂
カン・キン・クン・ケン・コン	kan・kin・kun・ken・kon	坎・金・昆・肯・空
サン・シン・スン・セン・ソン	san・sin・sun・sen・son	散・辛・隼・森・送
タン・ー・トゥン・テン・トン	tan・ー・tun・ten・ton	塘・ー・屯・天・同
ナン・ニン・ヌン・ネン・ノン	nan・nin・nun・nen・non	南・您・能・恁・弄
ハン・ヒン・フン・ヘン・ホン	han・hin・hun・hen・hon	汗・很・混・亨・哄
マン・ミン・ムン・メン・モン	man・min・mun・men・mon	曼・民・蒙・面・莫
ヤン・ー・ユン・イェン・ヨン	yan・ー・yun・yen・yon	央・ー・允・言・用
ラン・リン・ルン・レン・ロン	ran・rin・run・ren・ron	朗・林・埒・廉・隆
ワン・ー・ー・ウェン・ウォン	wan・ー・ー・wen・won	完・ー・ー・文・翁
チャン・チン・チュン・チェン・チョン	can・cin・cun・cen・con	羌・沁・充・千・穹
パン・ピン・プン・ペン・ポン	pan・pin・pun・pen・pon	盼・品・碰・片・蓬

2-4 子音

アイヌ語カナ表記	アイヌ語ローマ字表記	中国語漢字表記
ン	-n	恩
ク	-k	咳
ツ	-t	吡
プ	-p	璞
ム	-m	嗯
シ	-s	唏
ラ・リ・ル・レ・ロ	-(a)r・-(i)r・-(u)r・-(e)r・-(o)r	啦・哩・噜・喇·咯
ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ	-(a)h・-(i)h・-(u)h・-(e)h・-(o)h	哈·嘿·呼·嘻·哧

表3 表記表を使って翻訳したアイヌ語の例

アイヌ語	日本語訳	中国語表記	中国語訳
アイヌ	アイヌ、アイヌ民族	阿伊努	阿伊努人、阿伊努民族
カムイ	カムイ	卡姆伊	卡姆伊 (kamuy, 神灵)
ユカラ	英雄叙事詩	由卡拉	由卡拉 (yukar, 英雄叙事诗)
チセ	チセ (家屋)	其塞	其塞 (cise, 家、房子)
コタン	コタン (集落)	叩塘	叩塘 (村落)

「アイヌ語多言語化における中国語表記表」の作成にあたっては、国立アイヌ民族博物館のアイヌ語チームより助言を受けた。あわせて、北方民族博物館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、川村カ子トアイヌ記念館など複数の関連施設を訪問・見学したうえで原案を作成し、外部有識者に配布した。さらに、国立民族学博物館の研究者3名および、中国の少数民族出身で少数民族言語の中国語表記に関する研究を行っている外来研究員1名との会議を実施した。加えて、オンライン会議を通じて日本、中国大陸、台湾の専門家とも意見交換を行い、日本の民族学研究者1名、中国大陸の日本語教育・少数民族研究者4名、香港特別行政区の研究者2名などからも貴重な示唆を得た。

なお、本稿は2022年10月時点で完成していたが、さまざまな事情により、報告・発表は2026年になってから行うこととなった。その間、川村カ子トアイヌ記念館をはじめとする施設のリニューアルオープンがあり、他

の博物館のウェブサイトにも更新がみられた。本稿掲載にあたり、確認可能な範囲で阿寒湖アイヌコタンおよび北海道博物館のウェブサイトの更新を踏まえ、図8および図9を追加したが、その他の更新情報については時間と研究費の制約から網羅的に確認できていない。当稿はあくまでも当時の状況に基づくものである。また、ここで具体例を挙げる目的は、特定の施設を批判あるいは称賛することではなく、目標言語への理解が不十分のまま翻訳作業を進めると、博物館における多言語翻訳に混乱が生じ得ること、そして「アイヌ語の多言語化」という課題にはなお検討すべき点が多いことを示すことである。

今後は、先住民族の尊厳を尊重し、アイヌ語の振興と活用をさらに推進していく中で、「アイヌ語の多言語化」を中心とした議論がより広がっていくことが期待される。本稿がその一助となれば幸いである。

## 【注】

<sup>1</sup> 『アイヌ神謡集』の原文が19言語に翻訳され、ホームページに公開されているが、本稿の多言語サービス対象外とする。

<sup>2</sup> 「国立アイヌ民族博物館とはどんな博物館ですか?」国立アイヌ民族博物館ホームページ <https://nam.go.jp/inquiry/> (2022年9月1日閲覧)

## 【参考文献】

AFP News「中国語と英語の混合使用を禁止、「WTO」「GDP」もダメ」 2010年12月27日

<https://www.afpbb.com/articles/-/2780731> (2021年9月1日閲覧)

環境省「令和2年度 国立公園多言語解説等整備事業（補助事業）について」(2021年9月1日閲覧)

<https://www.env.go.jp/nature/2020/03/24/%20http://pwcms.env.go.jp/nature/np/ryokakuzei00/index.html%20/mat03-1.pdf>

胡士雲「現在の中国の言語文字政策」、『現代中国』第68号、1994年、pp.184-191。

黄冬柏「漢字の便利さと落とし穴——中国語学習における漢字の誤り」、『九州共立大学経済学部紀要』第115号、2009年、pp.91-102。

公益財団法人アイヌ民族文化財団 アイヌ文化を学ぶ「道内アイヌ文化関連施設紹介映像」

<https://www.ff-ainu.or.jp/web/learn/movie/index.html> (2021年10月1日閲覧)

国土交通省観光庁「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」

<https://www.mlit.go.jp/common/001029742.pdf> (2021年10月1日閲覧)

国土交通省観光庁「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/multilingual-kaisetsu.html> (2021年10月20日閲覧)

総務省「平成26年12月17日 2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会について」

[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000328214.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000328214.pdf) (2021年10月1日閲覧)

東京都歴史文化財団「文化施設のための多言語対応ガイド 2017」

[https://www.rekibun.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/multilingual\\_efforts2017.pdf](https://www.rekibun.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/multilingual_efforts2017.pdf) (2021年9月1日閲覧)

文化庁「文化財多言語解説整備事業 平成30年から令和3年」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/tagengokaiseki\\_seibijigyo/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/tagengokaiseki_seibijigyo/index.html) (2021年9月1日閲覧)

文化庁「文化財の多言語化ハンドブック」

[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/shuppanbutsu/handbook/index.html](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/shuppanbutsu/handbook/index.html) (2021年9月1日閲覧)

文化庁企画調整課「アイヌ文化を未来へつなぐ」『文部科学広報』2020年10月号、pp.12-15。

訪日ラボ <https://honichi.com/areas/hokkaido/hokkaido/> (2021年9月1日閲覧)

北海道観光振興機構「アイヌ文化関連施設 2021」

[https://visit-hokkaido.jp/ainu-guide/pdf/ainu\\_guide\\_p15.pdf](https://visit-hokkaido.jp/ainu-guide/pdf/ainu_guide_p15.pdf) (2021年9月1日閲覧)

森光有子 2010「ことばの違いから文化を読む」『相愛大学人文科学研究年報』(4) pp.60-44。

尹 亨仁「日本の多言語表示にみる日中韓3言語の漢語の使用——交差する漢字文化圏と共通語彙の状況を中心に——」、  
『人文学研究所報』第69号、2023年3月、pp.25-51。

謝辞:本研究は、国立アイヌ民族博物館研究プロジェクト「アイヌ語の中国語表記」の助成を受けて実施したものである。